広島大学大学院教育学研究科紀要　第三部　第50号　2001　355－361

日本における聴覚障害者の臨床心理学的研究に関する文献展望

藤　巴　正　和

(2001年9月28日受理)

A Review of literature on the clinical psychological study on the hearing impaired in Japan

Masakazu Fujitomo

The purpose of this paper was to review literatures about past clinical psychological studies on the hearing impaired in japan, in order to get suggestions about subjects on psychological supports and clinical psychological studies for the hearing impaired in japan. First, in the topic of the history and subjects on the clinical psychological study and psycological supports for the hearing impaired, it was showed that the pathological viewpoint was taken place for the cultural viewpoint in the understanding of the hearing impaired. Next, important studies about identity of the hearing impaired and psychological supports were reviewed. Then, it was showed that the subjects of supports and studies were spreaded to the hard of hearing, the people who lost one's hearing ability in the halfway of life, the hearing impaired at old age and the parent who had hearing impaired child. From this review, it was showed that cultural viewpoint was important in the understanding of the hearing and there were many fields of study to be explored.

Key Words: hearing impaired , clinical psychology , cultural viewpoint
キーワード：聴覚障害者、臨床心理学、文化的視点

1．はじめに

聴覚障害から派生する様々な問題を考えるとき、心理的な援助を必要とする聴覚障害者が多数存在することは容易に想像できるにもかかわらず、これまで聴覚障害者に対する本格的な心理的援助およびそれに関する理解をもたらすような研究への関心は非常に希薄なものであった。その要因として河崎（1996）は、「ことば」の問題が最も大きいと述べている。つまり、健聴の援助者および研究者と聴覚障害を抱える対象との間には、コミュニケーションの壁が大きく立ちはだかっているのである。しかし、最近になり、聴覚障害者に対する心理的援助の実践やそれに有益な示唆を与えるような臨床心理学的研究に対して、少しずつ関心が寄せられるようになってきた。このことは、障害者の福祉の向上や心理的援助の領域の拡大に伴い、あまり脚光を浴びてこなかった聴覚障害者の領域にも光が当たってきたことに対応していると思われる。ただし、わが国の聴覚障害者の心理臨床は途上についたばかりである（村瀬、1999）。

従来、聴覚障害者の心理的な諸問題やそれに対する援助、およびそれに有益な知見をもたらすような心理学的研究は、主にろう教育の領域においてなされてきた。しかし、上述のような動向に伴って、心理臨床や臨床心理学に携わる者からの実践および研究の報告も増えてきている。それに該当するものとして、聴覚障害者に対する心理臨床の実践に関する研究や、聴覚障害者のアイデンティティに関する研究、障害受容に関する研究といったものが挙げられる。また、実践および研究の充実に伴って、ろう者のみならず、難聴者や中途失聴者など、ろう教育や手話の外にあったためにこれまで周辺とされてきた対象者にも関心が向けられるようになり、対象者それぞれの実態に即した形になりつつある。

今後、聴覚障害の心理臨床に取り組んでいく際には、このような聴覚障害者に関する臨床心理学的な理解や知見が有益であり、必要になってくる。そこで本稿では、日本における聴覚障害者の心理臨床や臨床心理学

的研究の課題について示唆を得るため、これまでの聴覚障害者に関する心理学的な研究の流れもふまえながら、日本における聴覚障害者の臨床心理学的研究に関する文献を展望することを目的とする。

2．聴覚障害者に関する臨床心理学的研究および心理的援助の流れと課題

2－1．臨床心理学的研究の流れと今後の課題

聴覚障害児の教育および研究をリードしてきた中野（1999）は、これまでの聴覚障害児・者に関する心理学的研究の流れをまとめ、聴覚障害研究の目的を次のようにまとめている。(1)聴覚障害者を被験者として、通常の人々の心的機制を解明する、(2)聴覚障害者の心身の諸特性を明らかにする、(3)聴覚障害者の教育やリハビリテーションの問題を解決する。そして、特に(3)においては、法則定立的な方法による研究よりも、個性記述的な方法による研究がより望ましい、と述べている。また、今後の課題について、以下のような諸点挙げている。(1)聴覚障害心理研究では、外側からの接近だけでなく、内側からの、はたらきかけを行いながらの接近が、より大きな意味をもっていること、(2)聴覚障害者理解には歴史的観点も無視できないため、当該人の生育史のみならず、障害者を取り巻く歴史的・社会的諸条件の理解も要請されること、(3)聴覚障害者と十分なコミュニケーションが行えること、(4)これまで研究が不十分であった難聴者や中途失聴者の問題を含め、成人聴覚障害者の問題解決への取り組みがなされること、などである。

以上の指摘からも、対象の世界に寄り添い、問題を対象者個人にのみ還元しないという考えに基づいた研究が望まれていることが分かる。したがって、これまで臨床心理学や心理臨床学が主に取り組んできたような、対象者が体験している世界を描き出した上で援助のあり方を模索するような研究が求められていると言えよう。

2－2．聴覚障害者の心理的援助における課題

村瀬（1999）は、「障害を受容することや目標を軽々しく設定し、当事者に要請するのではなく、障害をもつ人、一人一人のあり方の必然性を受けとめるように務めたい。重い障害をもつ人々の声なき声に耳を澄まし、彼らが真実の苦しみを語る傍らに居られるようでありたい」と述べている。このような態度を実現するには、どのような理解が求められるのであろうか。このような、聴覚障害者に対する心理的援助における課題について滝沢（1999）は、「聴力欠損の時期や程度だけではなく、受けた教育、あるいは文化的背景によって価値観は異なり、アイデンティティのよりどころをどこに置くかは、聴覚障害者といえどもさまざま」であり、「聴覚障害者と心理臨床的なかかわりをもつ場合、このような背景のことも含めて対応していかなければならない」と述べている。つまり、対象者各個人の障害の詳細や教育歴といった個人の属性だけでなく、文化的背景やアイデンティティといった、社会的な文脈の中での個人のあり方や態度に関する理解も重要になってくることが分かる。

2－3．病理的視点から文化的視点へ

近年、聴覚障害者の中でも特に、ろう者を捉える観点として、健聴者をモデルとした従来の障害者観（病理的視点）と対比させる形で、文化的視点の重要性が主張され始めているが、鳥越（1999）がろう者と文化に関する研究を概観している。それによると、病理的視点とは、聴覚障害を欠損という点から捉える視点であり、この視点に立つと、聴覚障害者の否定的な側面のみが強調されてしまいがちであるという。それに対して、聴覚障害者の中でもとりわけろう者を、健聴者からの逸脱という観点ではなく、手話という１つの言語をもつ人たちであるとする視点があり、それが文化的視点であるという。手話が１つの言語として存在するならば、その話者から構成される社会（デフ・コミュニティ）が存在し、デフ・コミュニティはマイノリティ・グループと考えることもできるのである。そして、ろう者は、デフ・コミュニティの成員として機能しながら、なおもより大きな社会、すなわち健聴者の世界に参加することが尊重されるという。このように、ろう文化に関する論議は盛んになり、様々な立場からろう文化に関する論考がなされるようになってきている（現代思想４月臨時増刊号、1996）。

臨床心理学および心理臨床学においては、対象者を外側から客観的に捉えるような診断的理解だけでなく、対象者との関係に参与し、対象者の内的な世界や対象者が置かれている立場から理解を進めていくような共感的理解が重視されている。したがって、障害への病理的視点から文化的視点への転換は、臨床心理学的理解において身近なものであり、研究を進めていく上で重要な示唆を与えるものと考えられる。

そこで以下に、そのような臨床心理学的理解をもたらす研究の領域を取り上げて展望する。すなわち、聴覚障害者のアイデンティティに関する研究と、聴覚障害者に対する心理的援助の実践とそれに関わる研究、の２つの領域である。

3．聴覚障害者のアイデンティティに関する研究

聴覚障害者のアイデンティティ発達のプロセスに関する研究の先駆けとして、坂田（1990ａ、ｂ）の研究がある。坂田は、聴覚障害者15名を対象に面接調査を実施し、聴覚障害者の自我同一性形成について検討した。対象者は、手話の使用と自己像において「非連続性」が目立つと思われる聴覚障害者であった。すなわち、自己変革を迎える前の時期には手話をほとんど使用しない、「健聴者に近い」状態（口話、日本語の力、学力といった面で）で、自己変革後に初めて手話を使用し始めた聴覚障害者であった。そして、自我同一性形成過程について次のような図式を描き出した。すなわち、「聴覚障害者であることを否認し、健聴者を理想とする」→「転換点：自分は聴覚障害者である事実をつきつけられる経験と、手話による対等な人間関係と聴覚障害者のモデルとの出会いとに触発されて、意識に変化が生じ始める」→「自分は聴覚障害者であることを自覚し、自らの価値を聴覚障害者であることに求める」→「一般社会に主体的な関心を拡げ、聴覚障害者として健聴者と対等に生きたいと願う」というプロセスである。ここでは、「手話による対等な人間関係と聴覚障害者のモデルとの出会い」が重要視されている。それまでは一般的にろう学校では使用が禁止されていた手話を、ろう者の自然な言葉として積極的に使用を認めていこうとする社会的・教育的な動きがみられるようになったという経緯があり、坂田の研究の知見はその流れに沿っているものではないかと思われる。

次に、聴覚障害者のアイデンティティに関する実証的研究として、山口（1997、1998、2001）の一連の研究があり、聴覚障害者としてのアイデンティティと健聴者世界との関連について検討した。山口（1997）は青年期にある聴覚障害学生48名を対象にした質問紙調査によって、健聴者の世界との葛藤と「デフ・アイデンティティ」の関連を検討した。これは、この問題について臨床的な検討を行ったSchlesinger & Meadow（1972）に示唆を得て、実証的検討を行ったものである。また、「デフ・アイデンティティ」の定義については、Weinberg & Sterritt（1986）に従い、「聴覚障害者における健聴者集団と聴覚障害者集団への所属意識のありかた」としている。聴覚障害者と健聴者への所属意識が統合されている「統合アイデンティティ」のみが、健聴者の世界との葛藤の低下につながる可能性があることを見出した。また、「健聴者アイデンティティ」は健聴者の世界との葛藤の低下につながる可能性が示唆され、「聴覚障害者アイデンティティ」は健聴者の世界との葛藤の低下につながる可能性がないことが示唆された。また山口（1998）は、聴覚障害学生141名を対象にした質問紙調査によって、健聴者の世界との葛藤が心理社会的発達に与える影響とデフ・アイデンティティが心理社会的発達に与える影響も検討した。そして、健聴者の世界との葛藤が心理社会的発達に多様かつネガティブな影響を与えており、障害の受容がアイデンティティ形成につながることを見出した。また、デフ・アイデンティティが心理社会的発達に影響を与えており、「統合アイデンティティ」がアイデンティティ形成にポジティブな影響を与えていること、などを明らかにした。

さらに山口（2001）は、ろう学校在籍経験の長いろう青年４名を対象に面接調査を実施し、聴覚障害青年のアイデンティティ発達のプロセスについても検討している。そして次のような知見を見出している。(1)ろう者のアイデンティティ発達のプロセスは、混乱、出会い、異議申立てと没頭、統合の４段階で捉えられた。(2)混乱段階で否定的な自己像が抱かれており、これには健聴者の教師のろうや手話に対する文化的理解の欠如が関連していることが示唆された。(3)出会い段階では、肯定的な自己像を形成しているろう者との出会いが、健聴者中心の価値観からの転換や肯定的な自己像の形成につながることが示唆された。(4)異議申立てと没頭段階では、健聴者への異議申立て行動や所属する団体の活動への傾倒が生じることが示唆された。(5)統合段階では、ろう者としての自覚が高まるとともに内在化され、健聴者との関係もバランスのとれたものになることが示唆された。(6)この４段階のうち、異議申立てと没頭段階は、ろう者アイデンティティを形成する前段階として重要な役割を果たしていることが示唆された。

また、アイデンティティの観点を第一とせず、障害を抱える自身に関する意識の変化のプロセスを見出そうとする研究もみられる。そこでは、自我発達や障害受容といった観点が主なキーワードになっているが、アイデンティティの問題にも密接に関連している。したがって、これらの研究もアイデンティティ研究の範疇に含めることもできるのではないかと思われる。

杉田（2000）は、普通学校にインテグレートした聴覚障害者の自我発達について、聴覚障害の成人４名を対象にした面接調査によって検討している。結果より、普通学校にインテグレートした聴覚障害者の障害意識は、肯定的な自己意識と否定的な自己意識の間の変動を繰り返しながら、より肯定的なものに近い安定した自己意識の領域へと近づいていく過程を明らかにしている。

藤巴（1998）は、この領域においてもまだ焦点が当てられていない難聴者の障害受容過程について面接調査によって検討している。対象者は手話をコミュニケーションの中心としない成人の難聴者７名であり、対人関係とコミュニケーション手段の観点から、難聴者の障害受容のプロセスを示した。そして、手話に対する複雑な意識を取り上げながら、健聴者とろう者との間でのアイデンティティ確立の困難さが指摘されている難聴者が、ろう者とは異なる難聴者としてのアイデンティティを確立していくプロセスを示した。また、難聴者においては、モデルとなる同障者との出会いだけではなく、理解ある健聴者との出会いも特に重要であることを指摘している。これにより、健聴者と聴覚障害者（主にろう者）という二項のみの観点による、ろう者と手話をキーワードにした従来の障害受容過程の理解では説明しきれない、難聴者に特有の障害受容過程を明らかにした。

以上のような研究からうかがえることは、健聴者・聴覚障害者の両方の世界との交流があり、どちらのアイデンティティにも偏らない統合されたアイデンティティが対人関係および心理的適応の上での葛藤を低下させやすいことがうかがえる。しかし、健聴者としてのアイデンティティや聴覚障害者としてのアイデンティティが一概にネガティブなあり方と見なされることには問題があると思われる。この点について、山口（1997）は前出の研究の中で、「健聴者の世界と十分に関与しているだけの書記日本語を獲得していない聴覚障害者にとっては、『聴覚障害者アイデンティティ』の方が重要になる可能性もあるため、この結果から直ちに『聴覚障害者アイデンティティ』が望ましくないとは言えない」と述べている。すなわち、そのようなアイデンティティを形成するに至った必然性があるのであり、そのような事情を認識することがアイデンティティ研究の上でも重要であると思われる。

４．聴覚障害者の心理臨床に関する実践および研究

聴覚障害者の心理臨床に関する実践およびそれに関する研究として、次のようなものがある。

滝沢（1996）は、精神科における聴覚障害者の実態を紹介し、聴覚障害者（特にろうあ者）の心理臨床の現状と課題について検討している。北海道内の精神病院に質問紙を送付し、64の病院の得られた回答をもとに、精神科で治療を受けている聴覚障害者の特徴や、治療場面での聴覚障害者のコミュニケーションの実態について報告している。そこでは、聴覚障害者への無理解やコミュニケーションの難しさからの誤診の可能性や、手話ができる治療者が少ないことといった問題を取り上げ、聴覚障害者の精神医療の遅れを指摘している。

わが国の聴覚障害者への心理臨床的な取り組みの先駆者である河崎（1996）は、社会的自立が困難な聴覚言語障害者を対象とする施設における心理相談の試みを報告し、聾者の心理療法と「ことば」について論じている（この他に、河崎（1993、1994）などの報告もある）。そこでは、分裂病が疑われた30歳代の男性と、知的障害と情緒障害を伴う40歳代の女性の２事例（共に言語獲得期前に失聴した全聾者）の面接経過が報告されている。考察では、面接において彼らが使用した主たるコミュニケーション媒体が「筆談」から「手話」へと移行した事実に注目し、聴覚障害者の精神衛生や心理発達を支える上で、聾者の「ことば」である「手話」環境が保障されることの重要性を示している。また、発達遅滞の子どもをもった聴覚障害者の母親への援助を行った岡野（1994）の実践を踏まえ、「治療者側が彼らの文化的背景とコミュニケーション媒体を保障しようとする開かれた態度をもって臨む限り、聴障者は、心理療法にとって何ら特殊な対象ではない」と述べている。

欧米での聴覚障害者への心理的援助に遅れをとること30年、1993年４月滋賀県の琵琶湖病院にわが国で最初の聴覚障害者外来が設立され、わが国の聴覚障害者に対する精神医療の先駆けとなった。中途失聴の障害をもつ医師である藤田他保氏、健聴の心理士の古賀恵里子氏らが中心となっている。古賀・藤田・小林（1994）は、欧米諸国の聴覚障害者に対する精神医療の歴史や現状、日本における聴覚障害者に対する精神医療の現状を概観した上で、琵琶湖病院の聴覚障害者外来設立の経緯や現状を紹介している。また、琵琶湖病院でのその後の現状や問題点については、藤田（1999）や古賀（1999）による報告がある。また、この領域における今後の課題として、古賀・藤田・小林（1994）は、聴覚障害をもつ心理療法士の養成や、聴覚障害をもつ心理療法士と健聴の心理療法士との共同作業が必要ではないかと指摘している。

その他、年代は古くなるが、ろう者の精神医療に関する文献として、ろうあ者の精神障害の現状についての調査（河崎、1969）、ろうあ精神分裂病の幻覚について力動論の立場から論じたもの（河崎、1970）、ろう学校の精神科校医の立場からろう教育について論じたもの（石神、1982）などがある。

聴覚障害者の心理臨床に関するこれらの文献からうかがえることは、現在の日本では専ら健聴者が占める

援助者と、対象者との間にコミュニケーションの壁が大きく立ちはだかっているということである。そのことが、面接関係といった内的な事柄から、面接構造や援助の環境といった外的な事柄にまで影響を及ぼしていることが分かる。そして、まだまだ試行錯誤の段階であることが分かる。しかし、コミュニケーションのすっかり壁を取り払ってから本格的な援助が可能になる、ということではないだろう。このようなコミュニケーションの壁を乗り越えていこうとする過程そのものが、コミュニケーションの壁によって様々な苦悩を抱いてきた聴覚障害者にとって、大きな援助になるということも言えるだろう。コミュニケートしようとする援助者が現前することで、対象者のコミュニケートしたいという欲求が動き始め、自発的に関係に開かれていく様子が、河崎（1996）の取り組みなどからうかがえるからである。

5．対象の細分化と多様化

聴覚障害者は、ろう者、難聴者、中途失聴者といったように、障害の程度や受けてきた教育、所属するコミュニティなどによって、いくつかに分類することができる。しかし、従来の研究では、「ろう者」あるいは「聴覚障害者」という名の元に一括りにされてきた。そして、難聴者、中途失聴者、高齢者など、ろう教育の対象外にある一群については関心が寄せられなかった。しかし、最近になり、そのような一群に対しても少しずつ関心が寄せられるようになり、研究の対象になりつつある。以下、「ろう者」あるいは「聴覚障害者」といったおおまかな捉え方とは異なり、ろう者以外の一群の定義を明確にし、その実情を捉えようとした研究について概観する。

5－1．難聴者および中途失聴者について

難聴者および中途失聴者の問題を扱った数少ない研究の一つに滝沢（1995）のものがある。難聴者と中途失聴者の団体に所属する聴覚障害者を対象に、心の悩みに関するアンケート調査を行い、133名の回答をもとに悩みの実態を報告している。そして、中途失聴者や難聴者は「コミュニケーションに障害を感じてから不安、挫折感、絶望感などさまざまなこころの揺れが起こり、先天的なろう（あ）者とは違った心理的葛藤を体験する」と述べている。また、「自分が聴覚障害者であることを受容するまでに時間がかかり、そのプロセスで自分の生き方を模索せざるを得ない」と、その独自の問題の一例を示している。その他、アイデンティティ研究の項でも取り上げたように、藤巴（1998）も難聴者を対象に、その障害受容過程について検討している。

5－2．高齢の聴覚障害者について

高齢の聴覚障害者に関する文献もあまりみられない。

滝沢（1999）は、聴覚障害者の心理臨床における今後の課題を述べる中で、老人性難聴についても触れている。そして、難聴そのものが問題というより、その人の生き方や人生観に関わる問題も絡んでおり、他の聴覚障害者とはまた違った心理的な問題があるのではないかと述べている。しかし、老人性難聴に関する臨床心理学的研究はほとんどみられない。

高齢の聴覚障害者への心理的援助に関する数少ない文献の一つに、鳥越（1999）のものがある。それによると、ろう学校などの教育制度が整っていない時期に学齢期にあった聴覚障害者は、適切な教育を与えられないまま高齢を迎えているという。そして、同じ聴覚障害者の輪からも隔絶されている場合もあるという。鳥越は、そのような不就学ろうあ老人との十年来の関わりや、聴覚障害者専門の老人ホームでの調査を通して、不就学ろうあ老人が抱える問題や援助について論じている。そして、ろう者社会の役割の重要性を示し、不就学ろうあ老人がろう者の社会に参入するための方途を作り上げることが急務であると指摘している。

5－3．聴覚障害者児をもつ親

聴覚障害者本人ではなく、その親の心理に関する研究も少しみられる。西山・守屋（1989、1990）は、聴覚障害児の母親の自我発達の変容過程を検討するため、聴覚障害者の母親の手記を分析している。そして、子どもの成長とともに母親の苦悩の元と期待の内容が変化していることを指摘し、苦悩と努力の過程を繰り返しながら自我を再編成していく様子を明らかにしている。そして、障害児の母親に接する際、苦悩を共にしようとしがちであるが、本当に必要なのは母親と期待を共有することではないかと提言している。

河崎（1999）は、聴覚障害者の家族に対するカウンセリングやコンサルテーションの経験を元に、聴覚障害をもつ子どもと健聴の親という組み合わせの中で生じやすい問題について３事例を通して論じている。特に、健聴の母親への支援のあり方については、母子のかかわり合いの保障に焦点を当てるべきであり、母子双方にとって平等な「ことば」の重要性を説いている。また、アイデンティティ形成の問題に関しては、少しでも健聴者に近づくことを価値基準にした養育の問題点を指摘し、同一化対象との出会いの重要性を説いている。

その他、前田・森下（1984）は、聾児をもつ聾の母親を取り巻く諸問題に関する調査を行っている。そして、ろうの母親を取り巻く問題として、(1)コミュニケー

ションの問題、(2)人間関係の問題、(3)子どもの教育の問題、の３点を指摘し、このような問題に対して、ろう学校と福祉機関がろうの母親に果たす役割について考察している。

6．おわりに

本稿では、主に学術雑誌や学術書に掲載された論文や報告を中心にまとめたが、聴覚障害者の心理的援助に向けての心理学的研究のおよそ流れや課題を示すことはできたのではないかと思われる。村瀬（1999）は、「これまでは、障害のある人は社会の多数者である健常者を基準にして、それへ近づく努力の方向が多く採られてきたと言えるが、おびただしい情報がスピードをもって渦巻く今日、健聴者も聴覚障害者の世界へ歩み寄る努力、双方向性の交流が必要である」と述べている。本稿で取り上げた文献からも、心理臨床的援助といった双方の関係性が重視される領域においては、文化的視点に基づく理解が重要であり、また有益であることが分かった。また、まだまだこれから開拓していくべき領域が広がっていることも認識できた。しかしなによりも、他者との十分なコミュニケーションから疎外されてきた聴覚障害者に対して、コミュニケートしようとする意志を持ち、聴覚障害者の文化や心、それを根本から支える「ことば」を理解しようとする姿勢によってこそ、聴覚障害者の側が自らの「ことば」を通じて自分たちの文化や心を教えてくれ、健聴者と聴覚障害者の関係のあり方を模索していけるということが分かった。ただ、今回取り上げた文献の他に、聴覚障害者の心理臨床の現場からの草の根的な実践報告なども多数存在しているが、本稿ではそれを拾い上げることまではできなかった。この領域に関する研究者の数もまだ少ない状態であり、現場の実践や声が共有されにくい面がある。現場と理論が乖離せぬよう、その間を往復することも今後の課題の一つであろう。

引用文献

藤田保　1999　聴覚障害外来を訪れる人たち　村瀬嘉代子（編）聴覚障害者の心理臨床　日本評論社　99 - 120.

藤巴正和　1998　難聴者の障害受容過程に関する一考察　広島大学大学院教育学研究科修士論文(未公刊).

古田弘子・吉野公喜　1994　ろうの両親をもつ聴覚障害児の実態について　ろう教育科学、36、37 - 45.

河崎佳子　1993　聴覚言語障害者更生施設における心理相談の試み　日本心理臨床学会第12回大会発表論文集.

河崎佳子　1994　言語獲得過程における二者関係の果たす役割について－不就学全ろう青年との定期的継続面接をとおして－日本心理学会第58回大会発表論文集.

河崎佳子　1996　聾者の心理療法と「ことば」－聴覚障害者施設における心理相談の試み－　心理臨床学研究、14、75 - 85.

河崎佳子　1999　聴こえる親と聴こえない子－聴覚障害青年との心理面接から－　村瀬嘉代子（編）聴覚障害者の心理臨床　日本評論社　121 - 146.

河崎照雄　1969　ろうあ者の精神障害　ろう教育科学、11、27 - 33.

河崎照雄　1970　ろうあ精神分裂病の幻覚について　ろう教育科学、12、99 - 105.

小畑修一　1991　聴覚障害の受容と克服　聴覚障害、46、4 - 11.

小林昌之・東川健　1989　高等教育機関における聴覚障害学生の適応状況　ろう教育科学、31、17 - 24.

古賀恵里子・藤田保・小林豊生　1994　聴覚障害者と精神医療－聴覚障害者外来開設への取り組みを通して－臨床心理学研究、31、20 - 29.

古賀恵里子　1999　聞こえない人の体験にふれて　村瀬嘉代子（編）聴覚障害者の心理臨床　日本評論社　79 - 98.

前田直子・森下裕子　1984　聾児をもつ聾の母親を取り巻く諸問題　ろう教育科学、26、79 - 96.

村瀬嘉代子　1999　聴覚障害者の心理臨床から問われることーこの一書を編んで　村瀬嘉代子（編）聴覚障害者の心理臨床　日本評論社　147 - 170.

中野善達　1999　聴覚障害の心理研究の歩み　中野善達・吉野公喜(編)聴覚障害の心理　田研出版　189 - 203.

西山健・守屋国光　1989　自我発達の観点からみた聴覚障害児の母親の意識の変容過程－手記分析を通して－ろう教育科学、31、111 - 128.

西山健・守屋国光　1990　障害児の親の意識の変容過程の一検討　ろう教育科学、32、151 - 158.

岡野美年子　1994　知恵遅れの子をもった聴覚障害のお母さんとともに　心理臨床学研究、11、267 - 277.

坂田浩子　1990 a　聴覚障害者の自我同一形成について　ろう教育科学、32、61 - 81.

坂田浩子　1990 b　聴覚障害者の自我同一形成について（II）ろう教育科学、32、109 - 125.

S chlesinger,H.S. & M eadow,K.P. 1972 Sound and Sigh: Childhood deafness and mental health. Berkley: University of California Press.

杉田律子　2000　普通学校にインテグレートした聴覚障害者の自我発達に関する研究　ろう教育科学、42、145 - 158.

滝沢広忠　1995　聴覚障害者の心理的諸問題－中途失聴・難聴者のこころの悩みに関する調査から－札幌学院大学人文学会紀要、58、別刷、23 - 36.

滝沢広忠　1996　聴覚障害者の心理臨床について　札幌学院大学・杉山善朗教授退職記念論文集、117 - 123.

滝沢広忠　1999　聴覚障害者の心理臨床－今後の課題－村瀬嘉代子（編）聴覚障害者の心理臨床　日本評論社　147 - 170.

鳥越隆士　1999 a　ろうと文化　中野善達・吉野公喜(編)聴覚障害の心理　田研出版　157 - 172.

鳥越隆士　1999 b　不就学ろうあ老人への援助　村瀬嘉代子(編)聴覚障害者の心理臨床 日本評論社 147 - 170.

山口利勝　1996　聴覚障害学生における自己意識形成および現在の自己意識とアイデンティティ形成との関連についての研究　広島大学教育学部紀要　第一部（心理学）、45、139 - 144.

山口利勝　1997　聴覚障害学生における健聴者の世界との葛藤とデフ・アイデンティティに関する研究　教育心理学研究、45、284 - 294.

山口利勝　2001　ろう者のアイデンティティ発達　心理臨床学研究、18、557 - 568.

Weinberg,N. & Sterritt,M. 1986 Disability and Identity: A study of Identify Patterns in Adolescents with Hearing Impairments. Rehabilitation Psychology, **31,** 95-102.

（指導教官：一丸藤太郎）